

縮小社会と生命倫理学

縮小社会研究会
小川正嗣

目次

1、縮小社会と生命倫理学の類似性

(a)用語の整理から

(b)環境倫理学との類似

2、縮小社会におけるジレンマ

(a)環境問題

(b)人口問題

(c)死についての問題

A diagram consisting of two thick black arrows. One arrow starts from the right side of the text '(a)環境問題' and points towards the right. The other arrow starts from the right side of the text '(b)人口問題' and also points towards the right. The two arrows converge towards the text '(c)死についての問題', which is positioned to the right of the space between (a) and (b).

3、世代間倫理

1、縮小社会と生命倫理の類似性

縮小社会という用語は、多義的である。今後の世界はどのような道筋を通っても縮小社会となる。概念の混乱を避けるために簡単に分類すると、以下のよう分類できる。

成熟縮小社会：ソフトランディング路線

戦争縮小社会：ハードランディング路線

縮小社会研究会では、主として成熟縮小社会についての議論をしている。断りなく縮小社会という用語を使う場合、「成熟」を指す場合が多い。

生命倫理(学)とは

用語の誕生

Bioethics (バイオエシックス = 後に生命倫理と訳される) という言葉は、アメリカのヴァン・レンセラール・ポッターが1971年に最初に用いた。

ポッターが生命倫理に与えた意味は、「人口問題、食糧問題、環境汚染問題などを解決し、人類が地球上で生き延びていくための指針」であり、今日でいう「環境倫理」に相当するものだった。(危機意識)

ところがポッターの意図を全く離れて、それまで「医療倫理」でカバーされていた範囲の問題群に新しい形で答えていく営みの総称として普及していった。

(市野川容考『生命倫理とは何か』)

現在の生命倫理(学)の様々な定義

辞典を引くと、どの定義も微妙に異なる。

・新世紀ビジュアル大辞典

人を含めた生物の生命、生活に対してどこまでヒトの手を加えることができるかを考える倫理学的分野。人工授精、遺伝子組み換え、クローン生物、遺伝子治療などが問題となる。

・広辞苑

生命科学・医療・保険の分野での人間の在り方を倫理的・道徳的観点から系統的に論じる学問。広く地球上の動植物、自然環境との関わりにも及ぶ。

・インターネット辞典ウィキペディア(2016年3月15日時点)

生命に関する倫理的問題を扱う研究分野。生物学、医学、薬学、政治学、文化人類学、法学、哲学、経済学、社会学、心理学、宗教学など様々な分野と関連がある。ヒトの生命すなわち人命に限らず、動植物など全ての生命体を対象とする。

続・生命倫理(学)の様々な定義

生命倫理学に関わる方の意見

・今井道夫(札幌医科大学名誉教授)

生命倫理は医療の問題が中心であったし、今後もそれでいいと思う。

・栗屋剛(岡山商科大学教授)

倫理(倫理的考察)を基礎として、社会との関係において、主として人間の生命のあるべき姿を追求する学際的分野。災害、飢餓、戦争、テロ等もターゲットにする。

・村上善良(立正大学教授)

生命に関わる人間の行為について、人が人と幸せに生きていくためのルールを、私たち全員で討論し作成していく学問

高い学際性を持つ学問

広義の生命倫理学は高い学際性を持つ分野である。

「学際性」と言うと、専門知識を持つ人々のみがそこに関わるように感じられるが、広義の生命倫理学の対象とする範囲は、専門家の中に収まりきるものではない。

私たちは、生命はどうあるべきかという問いに、日ごろから晒されている。従って、そこには専門家のみならず、広く一般の人々も積極的に参加し、意見交換をしていくのが望ましい生命倫理学の在り方であると言えよう。

さらに学問と学問の間の調整役としての役割も、生命倫理学には期待されている。

今日の生命を巡る行為の問題を解決するためには、「むしろ相互に関連しあう専門領域の内容にも積極的に介入して発言し、問題提起」することが必要だからである。

村上喜良『基礎から学ぶ生命倫理学』

ここにも、縮小社会研究の発想と似ている部分が表れている。

縮小社会学

縮小社会にも、「学」という語をつけ定義付けを試みることによって、生命倫理学との親和性が見えてくる。

自分なりの定義

資源・エネルギー問題、環境問題、人口問題などの話題を土台として、拡大する欲求を批判的に検討しながら、生物の一種としての人類、ひいては生物一般がどのような方向へ向かうべきかを問う学際的な取り組み。

縮小社会学も学際性が高い。
こう書いてみると、環境倫理学とも似ている。

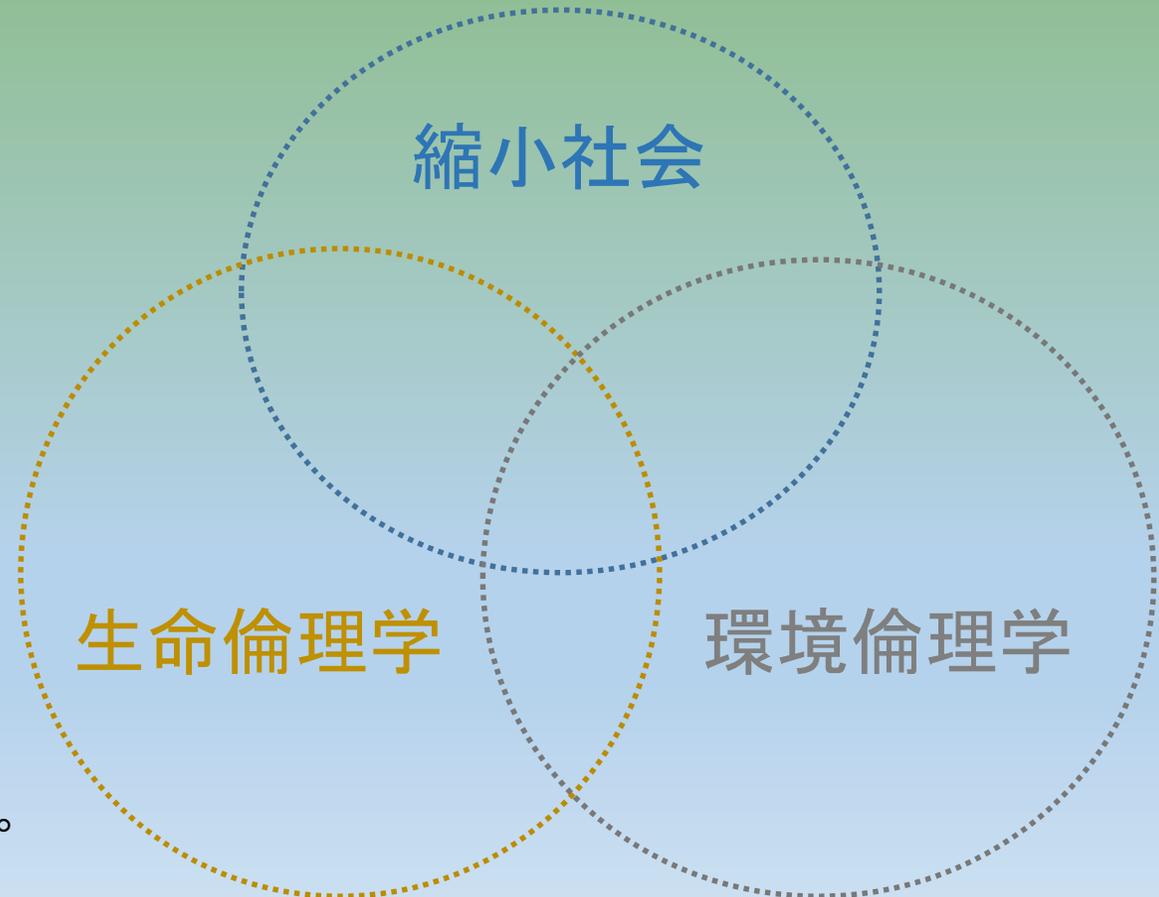
環境倫理学の発想は・・・

人間は全ての自然とつながることで生きている。従って人間の生活だけを豊かにするために、その自然を搾取するようなことは、人間の破滅につながる。そのような考え方は見直すべきだ。



縮小社会の発想に近い

イメージ



実際は他にいっぱい関連分野があります。

生命倫理学と類似の諸学問との関係

↑ 広い生命倫理学

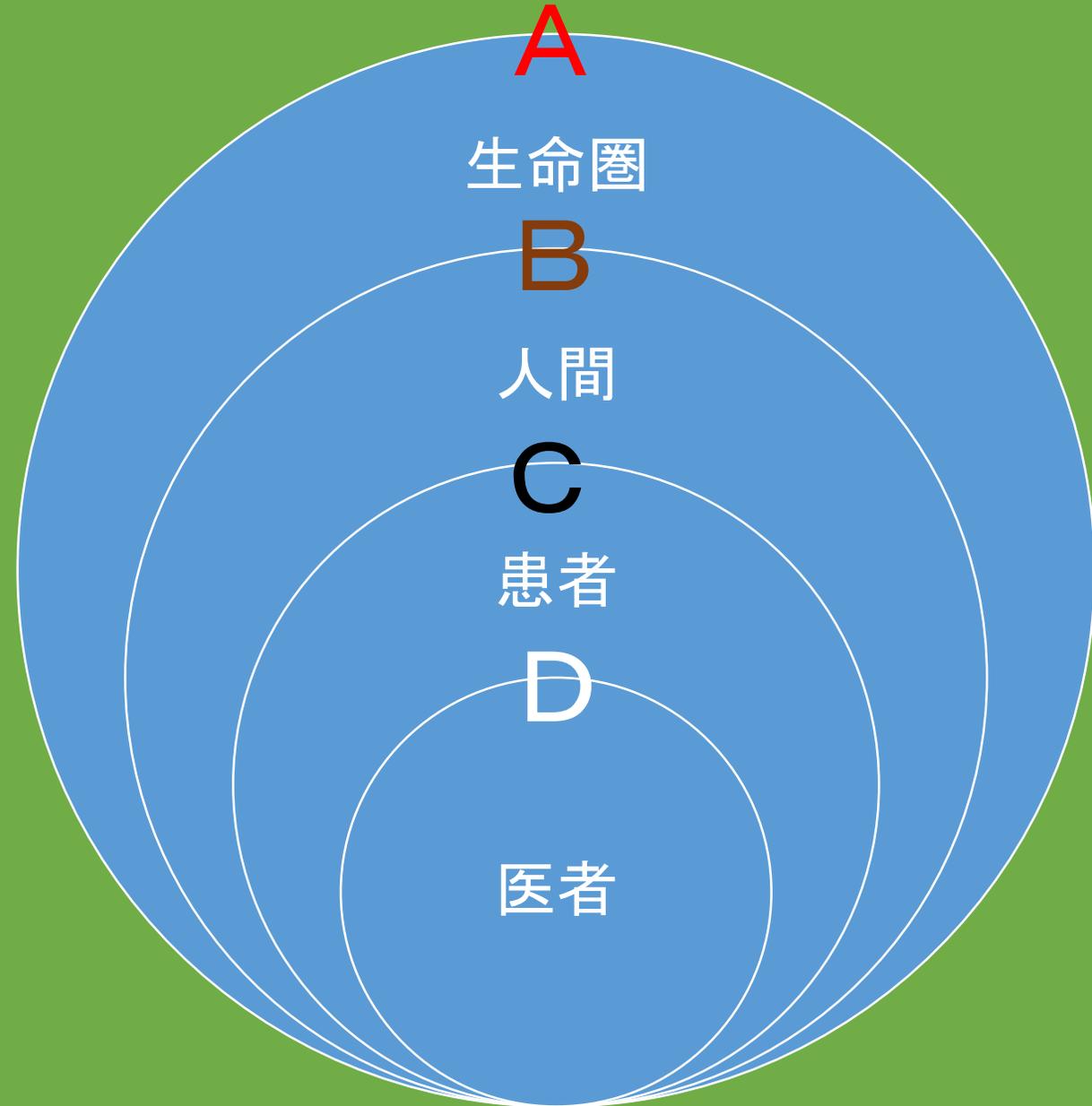
A: ディープエコロジー
(生命圏中心 縮小)

B: シャローエコロジー
(人間の利益中心)

C: 生命医学倫理

D: 医療倫理

↓ 狭い生命倫理学



縮小社会学は、広い生命倫理学的要素を含む

縮小社会の研究は、完全にディープエコロジーの立場か？

縮小社会の研究は、人類がどう生き残るのか？という問いに対して、正面から取り組む。それは人類の持続のため、つまりは人類の利益のためとも言えそうである。

現在の縮小社会の研究は、前のスライドでいうA～Bの中間に位置すると言っていると思われる。

人類の利益を考えるなら、他の生物の生存も考えなければならない。生態系の持続なくして、人類の持続はない。人類も環境の一部である。従って環境そのものに価値がある。

縮小社会研究会には、「生物多様性分科会」が！ （私参加してませんケド・・・）

元々縮小社会論の内に存在する生命倫理学

縮小社会への問いの根本は、

「このまま資源の消費等続けると、未曾有の危機が訪れ多くの命が失われる。そんなことが許されるのか？」

というものであろう。もちろん、可能ならば回避したい(許されない)との答えが続く。

実は元々の縮小社会という発想の内に、既に生命倫理的発想が存在しているのである。

加えて言うなら、縮小社会という用語を使用する場合に、暗黙の内に成熟縮小社会を想像するのは、このような根本的な問題意識と回答がみんなの内にあるためである。

2、縮小社会(移行)におけるジレンマ

- 1)このまま経済発展・環境開発をして、有限な資源を貪ってでも、豊かさや利益をどんどん拡大していくのか？
- 2)それとも利益追求をやめて、石油やエネルギーを含む有限な資源を節約し環境を守るために、経済発展・環境開発に歯止めをかけるのか？

というジレンマが現代社会にはある。

(縮小社会研究会にはない。はっきりと2の立場である。)

縮小社会への生命倫理的課題は、大きくはこの点に集約される。

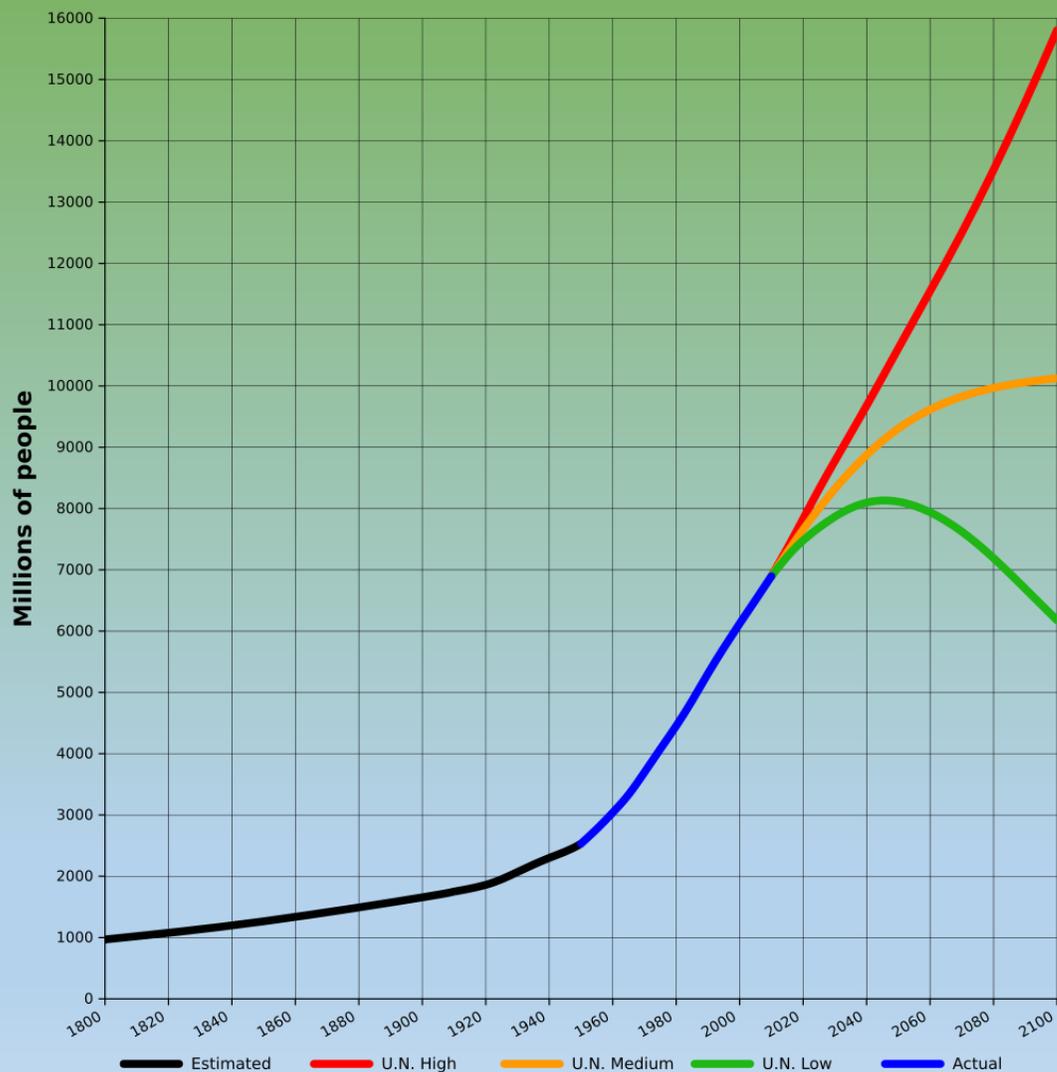
共有地(コモンズ)の悲劇 (ハーディン)

全ての人々が使える牧草地を想像する。それぞれの牧夫はたくさんの牛を放牧するだろう。その土地が毎年生産する牧草の量が、全ての牛が毎年食べる牧草の量を上回っている限りは、この牧草地は平和である。

しかしながら、牧夫が牛を増やし、消費される牧草の量が多くなるとどうなるだろうか？資源が枯れ果て、悲劇が起こるのである。

・地球という共有地に、人間がどんどん増えている今日の世界はこれと似ているのでは？

世界人口の推移と環境破壊



産業革命以降、人口は急増している。食糧生産の向上や医療の発達が始まったからである。このように経済性や効率性を追求したまでは良かったが、環境への配慮はなかった。このため、水質汚濁、大気汚染、土壌汚染が頻発した。

例

- ロンドン・・・19世紀 石炭燃焼のスモッグ
- 1952年 高濃度スモッグ 死者1万人以上
- アメリカ・・・1940年代 工場や車の排気ガスが原因の光化学スモッグ
- 日本・・・四大公害
- 酸性雨問題
- オゾン層破壊問題
- 他多数

環境の収容力には限界がある

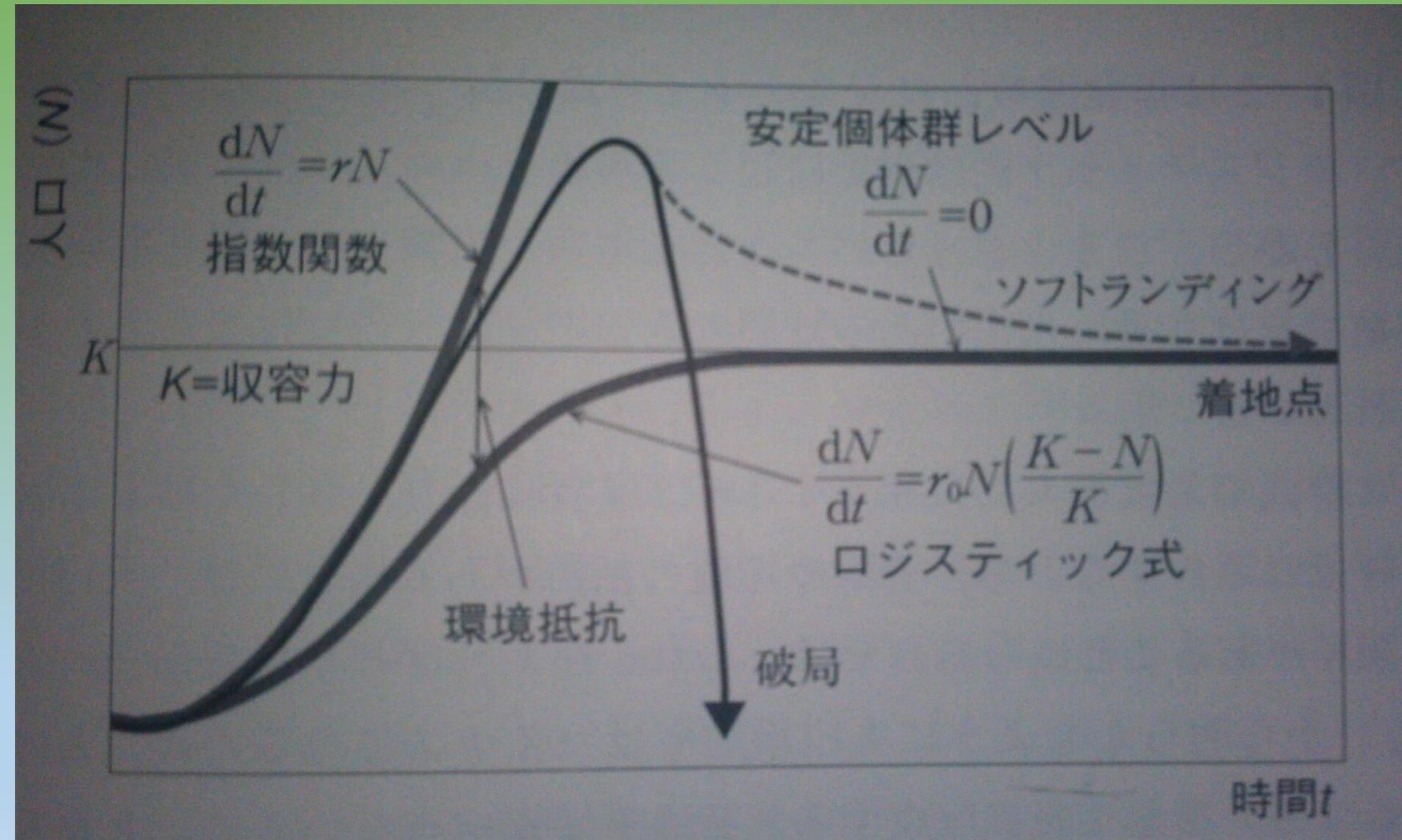
ロジスティック式

生物の個体群がどれぐらいのサイズまで成長するのかを表す方程式

マルサスは「人口は指数関数的に増加するが、食糧は加算的にしか増加しない」と述べた。

この式が示す通り、それではいつか破局を迎える。環境の制約があるからである。

K=環境収容力 も近年でははっきりしてきた。要は資源の残量である。



ハーマンデイリーの3原則

環境を利用する時に気を付けるべきことをよく表している。

1)「再生可能な資源」の持続可能な利用速度は、その資源の再生速度を超えてはならない。

2)「再生不可能な資源」の持続可能な利用速度は、再生可能な資源を持続可能なペースで利用することで代用できる速度を超えてはならない。
(例えば、石油のエネルギーを太陽光発電に回して将来使えるようにとか)

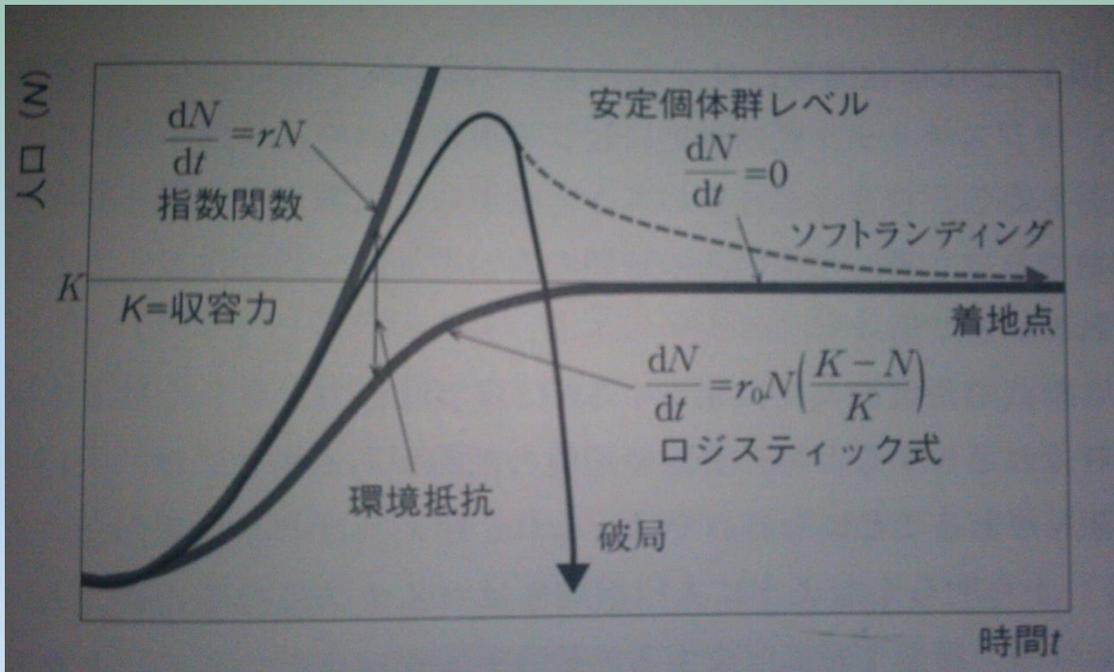
3)「汚染物質」の持続可能な排出速度は、環境がそうした汚染物質を循環し、吸収し、無害化できる速度を上回ってはならない。

色々な分野が同じような警告を発している



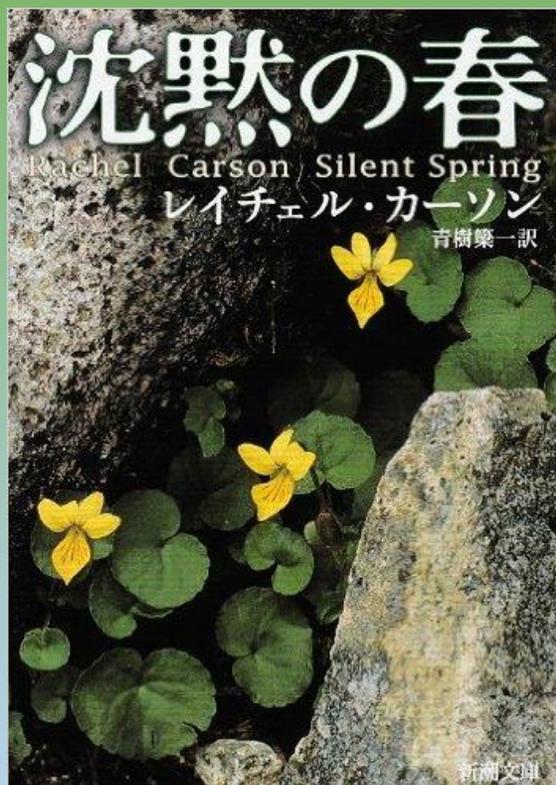
縮小社会研究会のロゴ

そっくり！

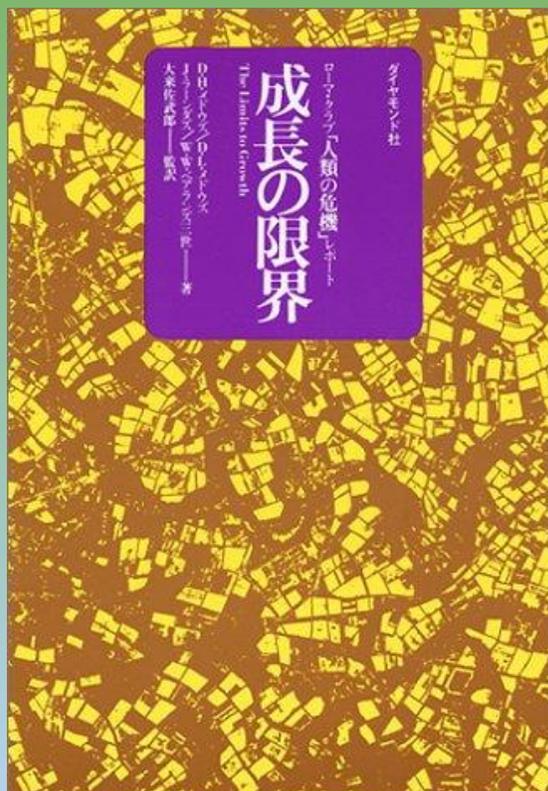


ロジスティック式

警告した書物が多い



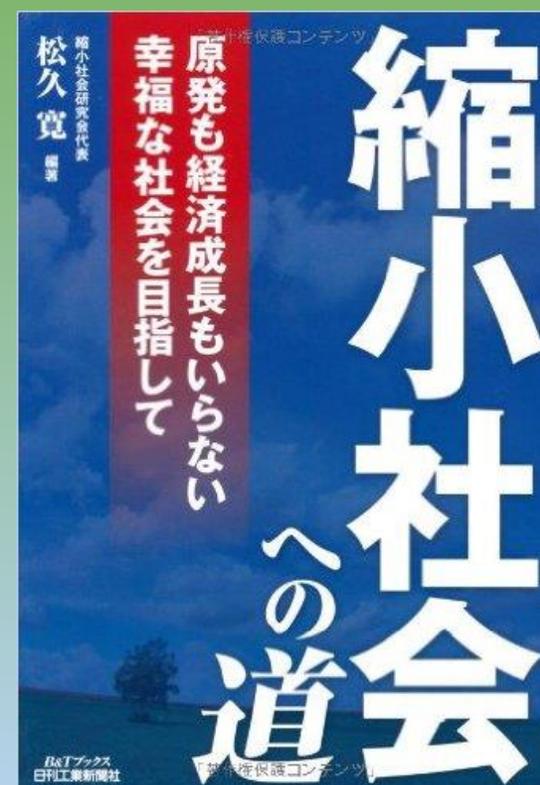
1962年



1972年



1973年

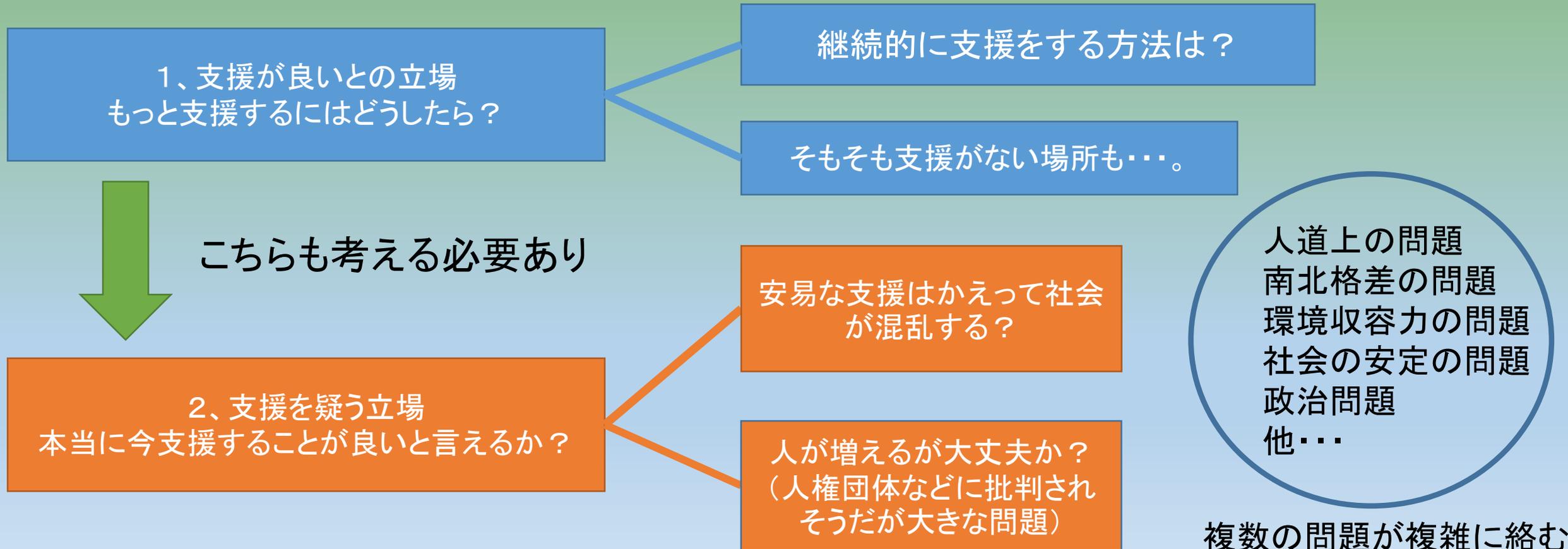


2012年

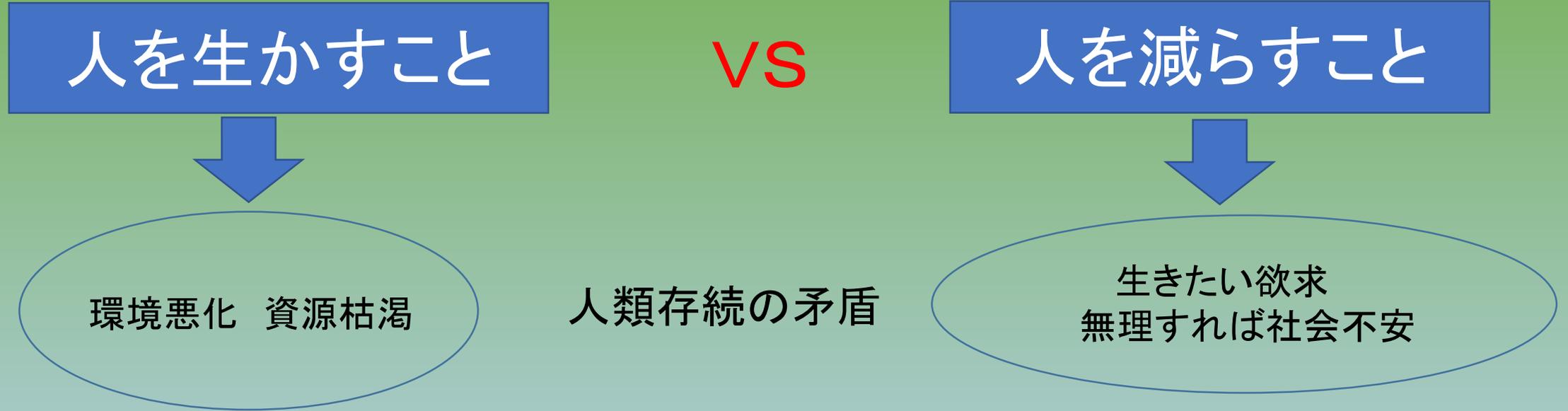
宣伝！

「良い」を改めて考える

我々が日頃良いと思っていることでも、こうした立場に立ってみると、改めて考えてみる必要に迫られる。例えば途上国の支援をどう考えるか？と言った事である。



新たな対立？



縮小社会の構想は、人が生き活きと生きられるような社会を理想としなければならない。しかしながら、同時に人口を上手く減らす手段も考えなければならない。

対立する面もあるが、どちらも必要というのが実情と言えそうである。

この問題は大きな社会的ジレンマで、現代における最重要論点の一つと思われるが、

しかし一番難しいのは、恐らくその実情を誤解なく多くの人に伝える方法である…。

どのように減らすか？

人口削減の方法を大別すると、以下の2通りだろう。

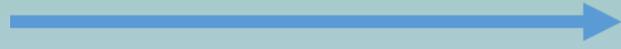
強制による人口削減



×

殺人・人権侵害
その他多数の問題

非強制による人口削減



OK・・・？ でもこちらしかない。
批判も多いだろうが、戦争をせずに縮小するためには、どこかの段階で必ず求められる。

縮小社会の実現のためには、非強制による人口削減を、どのように実現するのかが今後問題になると思われる。

人体商品化やサイボーグ化は人類にとって福音か？

人体の商品化（人体を医療資源その他として扱うこと）やサイボーグ化は、功利主義（人体功利主義）の観点からすれば、人類の幸福に役立つと言えるだろう。しかしながら今までの話と同じ理屈で、功利主義的観点に立っても、本当に幸福に役立つと言えるかを疑う必要が出てきた。

良かれと思っていたことが、もしかして破滅への追加シナリオの可能性？

人体商品化 サイボーグ化容認 → 寿命延長・人口増加 → 環境悪化 → 破局

↑
現在ずるずると進行中。
個人にとっては助かる！
（もちろん倫理的問題もあるけれど。）

↑
ここが問題となる。
生きたいからやってるわけだから増えるのは必至。

↑
ここに来るより前の段階で止めたい。

生命観と人生観の見直しの必要性

生命観の見直し

現在の生命の見方……命を奪うことは許されない！

見直し後の生命の見方……条件付きで安楽死・尊厳死を認める。またはそれに近づく何か。

人生観の見直し

自分はどう生きていきたいのか？ どういう最期を迎えたいのか？ そもそも自分とは何なのか？

他者とは何か？ 人類とは何か？ 自分は人類史の中でどういう位置づけか？

このような問いに向き合い、その上で条件付きでの**人生終末期の死の自己決定の容認**。



要は早く死にたい人は、早く……。個人的には有力説。

とは言え、死は大きなことである。死生学、哲学、文学、心理学、生物学などの色々な学問や人生経験が人生観を見直す考えの助けに。

3、世代間倫理

ここまでの内容は、世代間倫理にも関わる。また、縮小社会を考えること自体が本質的に世代間倫理の話題も内包する。

縮小社会研究会の立場からは、将来の世代がどうなっても良いと考えるのは、間違いであると言える。

縮小社会は、将来世代も安心して生活できる社会でなければならない。我々が今行っていることは、将来の人々にも影響を与えることを、よく理解する必要がある。

未来世代の人々も、対等な人間である。その利益を保護することは、今を生きる人の責任の一つだと言えよう。

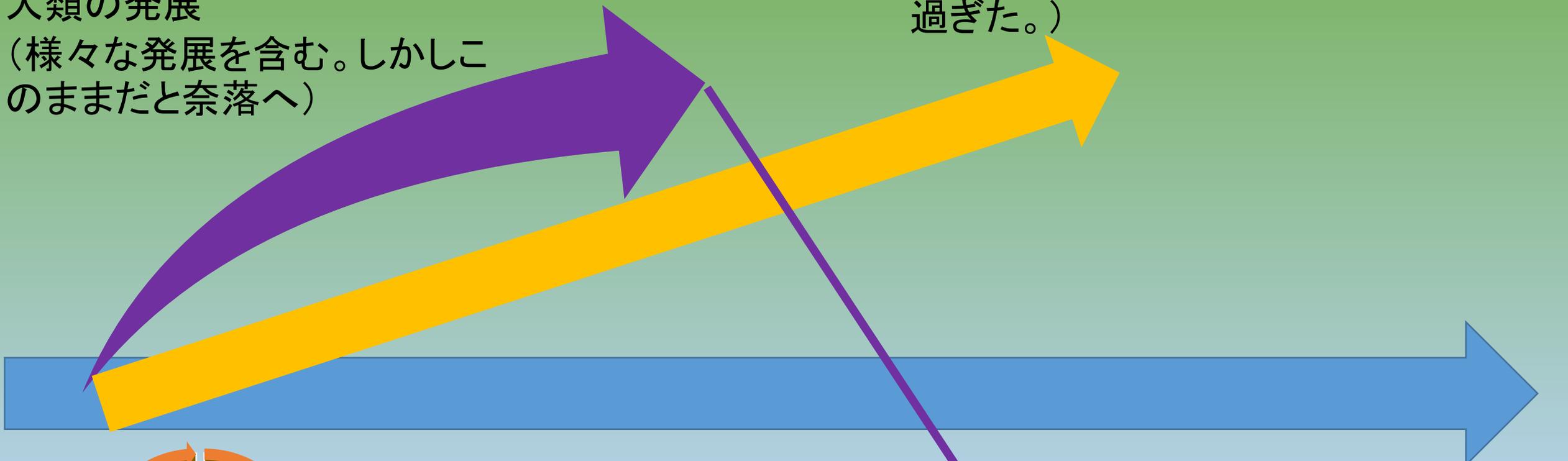
個人と発展、欲望

人類の欲

(猛スピードでしかも物質に偏りながら拡大。仕方ない部分もあるが行き過ぎた。)

人類の発展

(様々な発展を含む。しかしこのままだと奈落へ)



一人の人間の一生

(常に0からのスタート。何を身につけるかは、これから。教育は大事)

将来はどうか?
(絶望...)

時間の流れ

現在とそれ以降の世代は欲が拡大したところの世代だが、**知恵によって、それを変化させなければならない。**欲を抑えるか変化させるか、両方か。いずれにせよ救いは知恵のみ。

倫理学の立場から

今の信頼できる科学的な見解は、私たちが頭から奈落につっこんでゆく脱線列車の乗客にほかならないことを教えている。私たちが今までどうりにやっていくことは不可能である。
(略)

自由市場の支持者による貪欲の奨励は、経済の繁栄をもたらすという狭義の経済目標すら達成できなかつた。今やこれに変わる唯一の道を試してみるときである。十分な数の個人が私益という狭い物質主義的な考えを拒否するならば、互いの信頼を取り戻し、より大きい、より重要な目標に向けて一緒に働くことができるかも知れない。(略)

よりよい生き方が私たちの前に開かれている。よいことの基準として所得増進をおしすすめた消費社会のおかげで主流となった「よい」とは別の「よい」の語のあらゆる意味でのよりよい生き方である。よい生き方に関して主流となったこの概念をひとたび捨て去るならば、地球の生態系の保護や世界規模の正義に関する問題を再び表舞台に引き出すことができる。倫理学に基づく政治は、物事を根本から変えることができる。

終

ご清聴ありがとうございました。